

1) 上座部仏教・小乗仏教と大乘仏教の特徴述べ、日本における発展経緯と世界における現在の日本仏教について自分の経験、理解を中心に説明せよ。

2) 次の語を説明し、日常生活における用例との相違について自身の経験を踏まえて説明しなさい。

- A) 四苦八苦
- B) 免罪符
- C) ジハード
- D) 本地垂迹説
- E) 他力本願

**【解答】**

1)

釈尊の没後 100 年ほど経つと教理や戒律の解釈によって様々な分派が生まれた。これを部派仏教と呼び、大きく上座部と大乘部に分かれた。

上座部仏教(小乗仏教)と大乘仏教の大きな違いは死生観である。上座部仏教の修行者は悟りを開いた解脱後に阿羅漢となる。修行者が目指すのはむしろ「悟り」を開くことである。一方、大乘仏教は、釈迦如来の他にもたくさんの如来や菩薩が信仰と崇拝の対象となっている。宗派によっては出家していない一般庶民であっても、念仏を唱えたり、座禅を組んだりすれば、悟りを開くことができるという教えである。信仰の対象は悟りを開いた人全般で、一般庶民が仏様になれるという宗教である。<sup>1</sup>

今日の日本の仏教のルーツは大乘仏教の経典である。大乘仏教の経典とは、もともとサンスクリット語であった経典が中国で漢文化され、さらに儒教などの影響を受けた、中国風味の経典といってよいものである。

日本に仏教が伝来したのは 6 世紀。当時国の中枢では仏教推進派の蘇我氏とアンチ仏教の物部氏が対立していたが、蘇我氏が勝利して仏教の受容が決まった。そして、仏教を中央集権のツールとしたのが聖徳太子である。その後、ヤマト王権は国家として仏教を積極的に取り入れ、国家を守るために仏教を用いる「鎮護国家」の考えが強まった。奈良時代には南都六宗という学問のグループとも言える宗派が発展した。当時は宗教というよりも学問といった捉え方が強くあった。

学問的な奈良仏教に代わって、平安時代に入ると実践的な仏教が生まれてくる。最長と空海が登場するのが 9 世紀である。両者とも当時の中国で最先端であった密教を学んできた。特に平安貴族にうけ入れられ、次第に日本全域に広まっていった。

さらに鎌倉時代に入ると、新しく台頭した武士階級のために鎌倉新仏教が誕生する。開祖の多くは比叡山延暦寺をはじめとする天台宗で修行した、「最澄チルドレン」である。

最澄の弟子の一人である栄西は延暦寺で修行していたが、延暦寺だけでは満足できず、中国に留学し、禅宗を学び、帰国後臨済宗を開く。その栄西の弟子筋にあたるのが、曹洞宗の開祖となる道元である。曹洞宗の坐禅という修行によって誰でも悟りを開けるという考えは、広く武士たちの支持を集めていった。

法然も同じく、「最澄チルドレン」にあたる人で、南無阿弥陀仏を唱えれば成仏できるという専修念仏の「浄土宗」を開いた。その弟子である親鸞は、みんなで集まってひたすら念仏を唱える念仏道場を開き、「浄土真宗」の開祖となった。浄土真宗は 15 世紀の蓮如の時代に大きく発展する。蓮如の思想は「どんな悪人でも信心があれば極楽浄土に行ける」というシンプルなもの、その平等主義が多くの民衆の心を掴んだ。

仏教が宗教として社会を大きく動かす力を持っていたのは江戸時代以前までで、それ以降は少しずつ現世的なものへと変化していった。とくに「自分の力で修行して解脱するのは無理でも、念仏さえ唱えていれば解脱して成仏できる」という浄土真宗の教えは、当時の日本の庶民にぴったりであった。<sup>ii</sup>

現在の日本でも、仏教の修行は縁遠いものとなり、葬式の際に、お坊さんに続いて、よく分からない念仏と一緒に唱えるだけで、死者への弔いができた満足感を得る大変シンプルでリーズナブルな宗教観が一般的である。

最近、日本でもパキスタンやバングラデシュ出身の人が増えており、私の知人にもイスラム教を信仰している人がいる。メッカへの聖地巡礼や、日々の礼拝を欠かさないという人もいる。信仰心の薄いと言われる日本人である私から見て、何の疑いもなく信仰しているということ自体が驚きである。

しかし、一方で日本人の私もご飯を食べるときには「いただきます」と言い、新年になれば、当たり前のように神社にお参りに行き、お盆休みには帰省や旅行に出かけ、子どもには初節句や七五三の儀式で写真を撮り、葬式は仏教式、そんな日常に何ら疑問を感じていない。そうした日本人の行動も外国人の目には、熱心な宗教活動に勤しんでいると写るのかもしれない。

とりわけ、日本人は信仰心がないとか、宗教心がないから自立できないとも揶揄されるが、宗教に対する尊敬は篤いと自信を持ちたい。

2)

A) 四苦八苦

四苦とは人間にとって避けることのできない根源的な苦しみである生老病死である。そして八苦とは、この四苦にさらに、「愛別離苦」「怨憎会苦」「求不得苦」「五蘊盛苦」の 4

つを加えた仏教用語。

しかし、現在では仏教的要素がすっかりとなくなり、バタバタしている時に、さらに困ったことが生じた際に用いる。「泣き面に蜂」に近い意味で用いている。

#### B) 免罪符

本来は、ローマ-カトリック教会が、罪の償いが免除されるとして発行した証書のこと。15 世紀末には教会財政の原資として大量に発行され、ルターの批判を呼び宗教改革の契機となった。

しかし、現在では、罪や失敗を犯した際に、その分を取り返すための成功や金品などを指す際に用いている。

#### C) ジハード

スラーム教徒の異教徒との戦い。ジハードはイスラーム法に定める信者の義務であり、聖戦とも訳される。異教徒との戦いはムスリムの義務の一つであるが、その戦いで戦死した者は天国に行くことが出来ると信じられていた。

この語は 9.11 同時多発テロなどでもイスラーム教の用語として広く知られるようになった。しかし、本来のジハードは全てのイスラーム教の信者の義務であったが、最近ではイスラーム原理主義者たちによるテロ活動の代名詞として用いている。

#### D) 本地垂迹説

日本古来の神々は仏が姿をとったものであるとする神仏習合の思想。仏教と神道が融合したのみならず、道教・陰陽道・儒教など中国思想が流入し、さらに歴史的人物をも取り込んで、煩瑣な多神教的様相を呈するまでに発展したものの。

しかし、一般的な解釈としては、仏教が日本国内で穏便に展開するために、神道を取り入れた曖昧な信仰という意味で用いている。

#### E) 他力本願

他力本願の語源は仏教用語で、浄土真宗の親鸞が明示したもの。本来、「他力本願」の「他力」の意味は「自己を超越する力」で、「本願」には「仏による本来の願い」という意味がある。この 2 種類の熟語が組み合わせられ、「他力すなわち本願」から「他力本願」になった。もともと浄土教の仏教用語で「自らの修行による功德によって悟りを得るのでなく、阿弥陀仏の本願によって救済されること」を意味する言葉である。

この仏教用語も、現在では仏教的要素がすっぽりと抜け落ち、自分の力ではなく親や友人に頼ってばかりで、自立して行動できない人への中傷的な意味合いで用いている。

文字数：2691

【引用・参考文献】

---

<sup>i</sup> 山中俊之『世界の5大宗教入門:ビジネスエリートの必須教養』ダイヤモンド社,2019,pp.214-216

<sup>ii</sup>同,pp.242-249